

聖書：マタイ 12：46～50

説教題：イエスの母、兄弟姉妹

日時：2019年6月30日（朝拝）

今日の箇所ではイエス様のところにイエス様の母と兄弟たちがやって来ます。イエス様の母とはマリヤで、兄弟たちについては4人いたことが聖書に記されています。13章55節にヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダと記されています。イエス様は処女降誕で誕生した長男で、その後、通常の方法で男の子が4人生まれたわけです。その次の節を見ると「妹たち」という表現もありますから、複数の妹たちもいたことが分かります。その中の母マリヤと兄弟たちがイエス様に話をしようとして来て、外に立っていました。すぐ近づけなかったのでしょうか。そこで他の人が取り次ぎます。イエス様に「ご覧ください。母上と兄弟方が、お話ししようとして外に立っておられます。」と告げます。それに対するイエス様の応答の言葉が、初めて読む人にとってはショッキングな言葉だと思います。イエス様は話しているのをやめてすぐ家族のところへ駆けつけたかと思いきや、その逆でした。イエス様は言われました。「わたしの母とはだれでしょうか。わたしの兄弟たちとはだれでしょうか。」

ある人はこれを読んで、キリスト教は親や兄弟を大事にしないのか！と憤慨するかもしれません。しかしそうでないことは聖書全体を読んでいる人は分かります。はっきり分かることは十戒の第5戒に「あなたの父と母を敬え」とあることです。十戒は第1～4番目の神に対する戒めと、5～10番目の隣人に対する戒めに区分できますが、この第5戒は隣人愛に関する戒めのトップに来ています。またイエス様ご自身、30歳頃に公の生涯に入るまではガリラヤで両親に仕えて生活をされました。また後で十字架にかけられ、ご自身が最も苦しい中にある時も、母マリヤのその後の生活を心にかけ、その世話を弟子ヨハネに託した言葉も記されています。イエス様はそのように親を敬い、大事にされました。では今日の箇所の言葉はどう考えたら良いのでしょうか。それはこういうことです。キリスト教は親や兄弟を大事に考えるが、だからと言ってこの親への義務が一番上に来るのではないということです。先ほど父と母を敬えという戒めは十戒の第5番目の戒めとして出て来ると述べました。しかしそれは5番目であって1番目ではありません。それよりも先に1～4番目の神に関する戒めが来ています。すなわち人間への愛に関する戒めに先立って、神を愛し、神に従うべきことを語る戒めが、より優先順位の高いものとして述べられています。私たちが毎週礼拝で祈っている主の祈りも同じです。まず

先に祈られるのは神の栄光を求める祈りです。その後で私たち人間に関する祈りが来ます。これらのことにはっきり示されていることは、キリスト教の考え方は人間第一ではなく、神第一であるということです。人間中心ではなく神中心。人間優先ではなく神優先。イエス様は決して人間的な家族を低く見なしているのではなく、神への忠誠をまず第一に考えているということなのです。

あるいはこう言っても良いと思います。結婚を定め、家族の制度を定めたのは神です。それらは神が定めた良いものです。そして言うまでもなく神はこれらの制度の上におられます。ですからこの上におられる方を押しのけてまで、親や家族の声に聞くことを高く持ち上げるべきではない。神に従うという根本原則の下で、親に従うこと、家族を大事にすることが来るのです。ですからもしこの両者がぶつかるなら当然より根本的に優先順位の高い神に従うことが選び取られなければならない。「人に従うより、神に従うべきです」と使徒たちが繰り返して告白した通りです。もし神に従うことと対立するようなことを親が主張するなら、それは与えられた権威の乱用です。自分が神に取って代わろうとすることです。聖書は決して神に従うことを後回しにしてまで親に従うようにとか、人間関係を大事にするようにとは言いません。それは本末転倒なことです。

さて具体的にここではどのようにこの両者がぶつかったのでしょうか。このマタイの福音書にはなぜイエス様の母や兄弟たちがここに来たのか、その目的や理由は書いていないのですが、平行記事のマルコの福音書3章21節を参照すると分かります。「これを聞いて、イエスの身内の者たちはイエスを連れ戻しに出かけた。人々が『イエスはおかしくなった』と言っていたからである。」 続く節には、イエス様がベルゼブルにつかれているとか、悪霊どものかしらによって悪霊どもを追い出していると言われていたことが書かれています。私たちが最近マタイの福音書で読んだばかりの記事と同じです。このような人々の評価を耳にして、イエス様の家族がイエス様を連れ戻しに来たわけです。この時のイエス様の兄弟たちはまだイエス様を信じる者たちとはなっていなかったことが他の箇所から分かります。ヨハネの福音書7章5節：「兄弟たちもイエスを信じていなかったのである。」 そういう彼らはここでもイエス様に従う弟子グループには加わっておらず、「外」にいました。そしてイエス様のことを心配し、イエス様の家族として、イエス様を引き取りにやって来たわけです。その際、母マリヤと兄弟たちは、自分たちはイエス様の家族として特別の権利を主張できると考えていました。イエス様が人々に教えている最中でも、それを中断させて、中に割って入ることができると。イエ

ス様は今していることをとりあえずやめて、まず自分たちのところに来るべきである。まず家族の声に聞くべきであると。しかしこれはイエス様からすれば、イエス様が従事している神の国の宣教をストップさせようとする事です。この声には聞き従うことができない。これまで 11～12 章にかけてイエス様に対する色んな反応が記されて来ました。主に反対活動が記されて来ました。そしてある意味では実は今日の箇所も同じなのです。イエス様の家族はイエス様に逆らおうとしているわけではありません。イエス様のことを思ってここまで来ました。しかしその彼らの行動も、現実にはイエス様を神のための働きから引き離そうとするものです。イエス様はその声には屈するわけには行かない。そこで「わたしの母とはだれでしょうか。わたしの兄弟たちとはだれでしょうか。」と問い直す言葉を語られたわけです。そして弟子たちの方に手を伸ばして言われました。「見なさい。わたしの母、わたしの兄弟たちです。」

もし私たちがマリヤやイエス様の兄弟の立場にあったなら、かなりショッキングな言葉かと思います。しかしよく考えれば、これはもっともな言葉でもあります。どういうことでしょうか。50 節でイエス様は「天におられるわたしの父の～云々」と語っています。この言葉に示されているように、イエス様の家族を考える上での基本は、天の父とイエス様との関係です。イエス様の真の父は父なる神です。これは永遠の昔からの関係です。イエス様は私たちの救いのために人となって来られてヨセフとマリヤの間に誕生し、人間の父と母を持ちましたが、イエス様にとって根本的に重要なのはもともと天の父なる神との間にある家族関係です。

そしてイエス様はその天の父を父とする家族関係の中に、ここにいた弟子たちも入っている、彼らもその一員であると言われました。この神の家族の一員とされることは人間の家族にはるかに勝る特権です。地上の家族制度は神が定めてくださったものであり、本来的に良いものですが、人間の家族の愛には限界があります。さらに人間が罪を犯して墮落したことを経て壊れた状態になっています。親の愛も完全ではありません。最近では虐待やネグレクトなど一層深刻さを増しています。また家族同士相互の交わりも必ずしも理想的ではありません。なお神の恵みによって、互いに支え合い、助け合う機能が残っているとは言え、多くの点で不完全です。しかし神の家族は違います。何と言っても愛そのものであられる父なる神のもとでの最高の家族です。私たちの想像をはるかに超える、この上なく素晴らしい家族です。そして神とイエス様が永遠に生きられるように、その家族とされたものも永遠に生きています。この特権にあずかる者たちはどういう

者たちなのでしょうか。

50 節に「天におられるわたしの父のみこころを行うなら」とあります。この表現は前にも出て来ました。7 章 21 節：「わたしに向かって『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。」つまり「主よ、主よ」と口で告白していれば良いのではなく、実際に父の御心を行う者でなければならないということです。しかしその意味は、私たちが良い行いによって救いを得るとか、神の家族としてのメンバーシップを勝ち取るということではありません。父のみこころはどうやって知るかと言えば、それはイエス様のもとに来て、イエス様の言葉に聞くことによってです。11 章 27 節：「すべてのことが、わたしの父からわたしに渡されています。父のほかに子を知っている者はなく、子と、子が父を現そうと心に定めた者のほかに、父を知っている者はだれもいません。」そしてイエスさまはご自身のところに来る人を助けてくださいます。イエス様は続けてこう言われました。11 章 28～30 節：「すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心が柔和でへりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすれば、たましいに安らぎを得ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」ですからその人はイエス様からの支えと励ましと力を受けて、その教えに従う歩みをするのです。

ここにいた人たちはすでに立派にこの道を歩み始めていた人たちと言えます。先に触れた通り、このところイエス様に対する反対活動、拒絶活動が記されて来ました。当時の宗教界の権威者であるパリサイ人たちは激しくイエス様に敵対しました。そんな中でイエス様に従い続けることは容易なことではなかったと思います。イエス様の家族でさえ、心配して連れ戻しに来るような状況の中で、イエス様の家族は「外」にいたのに、弟子たちはその「内側」にいました。このような彼らはこれからもイエス様の言葉に聞き、イエス様の力によって、天の父のみこころを行う人となって行くでしょう。そういう人はだれでも、わたしの兄弟、姉妹、母である！とイエス様は言われました。「だれでも」と言われているように、この神の家族への門は広くオープンに開かれています。先には「わたしの母、わたしの兄弟たち」と言われましたが、——それはそこに来ているのが母と兄弟たちだったことに対応した表現だったのでしょうが、——この最後の言葉には「姉妹」という言葉も加えられています。すなわち女の人もイエス様の言葉に聞いて、イエス様に従うなら、立派な神の家族の一員とされるのです。イエス様の言葉に

聞き、イエス様に従う者は誰でも素晴らしいイエス様の家族の一員としていただけるのです。

私たちは今日の箇所メッセージにどう応答する者でしょうか。今日の箇所は11～12章全体の流れの中で重要な役割を担っています。ここまでしばらくイエス様を退ける人々の反応が記されて来た中で、この最後の部分には、そういう中でもイエス様に従っている人たちがいたこと、そしてあなたもそうであるように！というメッセージが込められています。そしてそういう者には素晴らしい報いがあると言われていています。ただしここで警告されていることは、私たちの愛する存在でさえも、私たちを主に従う歩みから引き離そうとする力になり得るといことです。私たちはできれば自分の家族や愛する人の声に聞きたいと思ひます。その願ひに優先して応えてあげたいと思ひます。相手もそれを期待し、要求して来るかもしれません。しかしそういう中でも優先順位を間違つてはならない。あらゆる人間関係にまさつて神に従うことを優先する者でなければ、神の家族の一員とされることはできない。慰めとなる事実は、イエス様の兄弟たちはイエス様の復活後、信じる者となることです。イエス様が天に上げられ、約束の聖霊が下るのを待つ間、エルサレムで祈りに専念する弟子たちのグループの中に母マリヤ、またイエス様の兄弟たちがいた！と使徒の働き1章14節は記しています。またイエス様の兄弟のヤコブは後にエルサレム教会の大牧師となりますし、新約聖書に収められているヤコブの手紙を書く人になります。また同じく新約聖書に収められているユダの手紙を書いたのもイエス様の兄弟、弟ユダです。イエス様がブレることなく、第一にすべきことを第一にする歩みの中で、今日の箇所に登場するイエス様の母も兄弟たちも救われ、天の父を父とする神の家族へと導かれて行つた。ですから私たちがも様々な人々の反応、様々な人々の反対がある中でも、このイエス様に従つて天の父のみこころを行う者となることを求めて歩みたいのです。イエス様はその者たちを指して、「見なさい、わたしの兄弟、姉妹、母なのです」と言つてくださいます。そして私たち自身がこの道にしっかり進むことによって、願わくは私たちの愛する人々もこの祝福へ招かれるために用いられる主の道具としての歩みへ導かれたいと思ひます。